

志賀重昂における郷土意識と国家意識

Regional Patriotism and Nationalism in SHIGA SHIGETAKA

岡田 洋司 Youji OKADA

概 要

本稿は国粋主義者志賀重昂を例として、近代日本において“郷土意識”が、国家意識とどのように結合しているのかを考察するものである。志賀重昂は、1880年代後半から90年代にかけて、主に雑誌『日本人』を舞台に“国粋保存主義”を唱道していたが、同時に故郷三河に対しての強い愛郷心をもっていた。そして、三河郷友会や雑誌『みかは』に強くかかわり、三河振興に対する言説を展開した。また藩閥政府を地方の発展を阻害するものとして批判した。しかし、大日本帝国憲法の発布に伴う大赦令の発令によって藩閥政府への批判的姿勢をゆるめ、日本全体の一体化を優先し、郷土意識は国家・国家意識の中に吸収されていった。

キーワード

志賀重昂 SHIGA SHIGETAKA

郷土意識 Regional Patriotism

国家意識 Nationalism

目 次

1. はじめに
2. 郷土三河への接点と“郷土愛”
3. 国粋保存主義に内包される“地方”
4. 志賀の三河振興構想
5. 薩長政府への緊張感の弛緩
6. おわりに

1. はじめに

一般論でいえば、近代日本において“郷土意識”（地域意識・地域アイデンティティ等さまざまな言葉で言い換えることも可能であろう）は、かなり一般的に存在してきた価値意識であり心性である。この意識は、一見、ごく自然に見えるものであるが、一面では、社会的統合の原理としての側面をもっていたことは否定できない。とくに国家意識というより強力な統合原理と結びつきその基礎をなす役割も果たしてきた。そうした郷土意識と国家意識の結びつきの問題については、別稿⁽¹⁾で検討したことがある（正確に言えば、そ

の点についての先行研究の整理であるが）。そのため、あらためて論じないが、本稿では、郷土意識と国家意識との関係の具体像を国粋保存主義者志賀重昂を例に検討する。

志賀重昂については、この半世紀にわたりかなりの研究蓄積があるが⁽²⁾、近年の研究においては、『日本風景論』（1894年）を中心に彼の風景観を問題にする一つの流れがある。米地文夫は、その代表的な論者であるが、米地は、『日本風景論』を論じる中で、この著作において、志賀の故郷三河についての記述に不自然な比重のかけかたがあり、その点に彼の故郷三河に対する強い“愛郷

心”があるとしている⁽³⁾。米地の一連の論考の論点は別にあるのだが、とりあえず、米地の研究は、志賀の中にある三河に対する郷土意識・愛郷心をあらためて指摘するものであった。

また、『日本風景論』だけではなく、志賀の生涯全体を通じての郷土意識・愛郷心については、志賀の弟子、後藤狂夫が、志賀の伝記中に次のように述べている。

〔前略〕三河及び岡崎に縁故ある古今の偉人名士で、殆ど先生の筆や舌によって紹介せられざるはなく、無名の後進僕等の如きすら、屢々三河郷友会の事業と共に紹介せられ、却つて恐縮赧顔することもある。又蓬萊峽勘八峽の如き風景絶佳の地域は、其地理学者たるの見地から、米河内の松茸足助川の鮎等は、其嗜好の立場から、勿論其吹聴を脱れん筈もなく、其ほか岡崎地方の鑄造花崗石器の生産等は言ふに及ばず、早川久右衛門氏家醸の八帖味噌を、故佐々木高行氏に依りて宮内省御用品に推薦…〔以下略〕
(4)

この叙述によれば、志賀がさまざまなかたちで郷土＝三河を意識し、その顕彰的な活動を行ったことがわかる。志賀の中には、『日本風景論』のみならずさまざまなかたちで愛郷心が存在していたのである。その意味で、郷土意識と国粋保存旨義という国家意識は少なくとも同時に存在していたと言えよう。そこで、本稿では、志賀が南洋視察旅行から帰り、政教社によって国粋保存旨義の論陣をはっていたと同時に『みかは』『三河郷友会雑誌』等三河の雑誌・新聞にかなり活発に寄稿していた1880年代末から90年代にかけて、志賀の中で郷土意識がどのようなかたちで存在し、それが国家意識とどのようにつながって一つの構造をなしているかという点を検討し、近代日本での郷土意識と国家意識を考える一つの材料を提供したい。

2. 郷土三河への接点と“郷土愛”

志賀重昂は、23歳の1886(明治19)年、軍艦筑波に乗って南洋諸島を視察し、翌年その体験をもとに、『南洋時事』を上梓した⁽⁵⁾。そしてこの著作によって、一躍注目を浴び、新進の論客として認められることになった。続いて1888(明治21)年には、三宅雪嶺らと政教社を設立し、雑誌『日本人』を発行した。そこで彼は、「国粋保存

旨義」を日本が採るべき方針として提唱したのであった。

また、志賀は『日本人』に健筆を振るう一方、『三河郷友会雑誌』および、雑誌『みかは』等、三河関係の雑誌・新聞に強い関係をもち、しばしば寄稿していた。

まず、『三河郷友会雑誌』(およびその発行元である三河郷友会とのかかわり)である。

三河郷友会は、1887(明治20)年、1885(明治18)年に設立され、かつ参加者不足で活動中止となった「三河親睦会」を再興するかたちで設立された団体である⁽⁶⁾。この時期、東京で同郷人の親睦等を目的として設立された郷友会・同郷会の一つであった。

三河郷友会の目的は、①「三河国人ノ和親團結ヲ計ルコト」、②「教育進歩ノ道ヲ講ズルコト」、③「殖産興業ノ振興ヲ企図スルコト」、④「本国青年進路ノ便ヲ計ルコト」⁽⁷⁾等であったが、その事業の一つとして、1888年12月から機関誌として『三河郷友会雑誌』を発行した。志賀は、この会の「協力員」(三河出身の著名人物が中心であり、名誉会員の性格をもつもの)となり、さまざまな行事に参加しながら、『三河郷友会雑誌』に寄稿したのである(ただし、寄稿は第1号から第68号までのあいだで、2回だけであり、寄稿自体はかならずしも多いわけではない)。

しかし、彼がそれ以上に積極的にのかかわったのは、『みかは』である。

『みかは』は、幡豆郡一色町(現在西尾市)で、1889(明治22)年6月に発刊された小雑誌(と言ってよかろう)である⁽⁸⁾。発行所は三河新聞社、社長は太田伊八であった。

この『みかは』は、第9号(1889年10月1日)に額田郡岡崎町で発行されていた『三河旬報』を吸収合併し、今までの月2回の発行から月3回の発行になった。志賀は、この『三河旬報』を吸収して雑誌の刷新を図るに際して、社主の太田伊八に請われて、この雑誌にかかわるようになったのである(なお、『みかは』は、その後、発行所を岡崎に移し、新聞化されて『三河新聞』になった)。

志賀によるとその経緯は次のようなものであった。

この年の夏、志賀は三河に帰省した。その際に太田と面談する機会があり、太田から、『みかは』を改良するにあたり、協力を請われた。それに対

して志賀は次のように協力を約束した。

予ハ三河国ニ生産シタル者ナリ、然リ而テ由来未タ一事ノ本国ニ盡シタルコトアルナシ、且ツ予ガ本国ノ時務ニ就キ懷抱スル処ロノモノヲ未タ公言スルノ機会ニ遭遇セザリシハ、平素特ニ遺憾トナス処ナリキ、請フ今ヨリ聊カ為ス処アラン、三河新聞紙上ニ時々鄙説ヲ発表スルガ如キハ、却リテ予ノ希望スル処ナリト⁽⁹⁾

志賀は、自分が三河の生まれでありながら、今まで三河のために貢献することができなかったので、今後は、この『みかは』に三河についての自分の意見を発表していきたいとしている。たしかに、東京で新進の論客としていわば売り出している志賀が、『みかは』のような地方の小雑誌にかかわろうというのは、志賀の郷土三河への愛着をあらわすものといえよう。すなわち、活動の初期から志賀の中には三河に対するかなり強い郷土意識・郷土愛が存在したのである。

では、その郷土意識・郷土愛の内容を検討しよう。

志賀には、その頃の作品として「三河男児歌」という漢詩がある。この漢詩は、前述の『みかは』第9号の表紙に掲載されたものである。この第9号は、志賀が『みかは』に協力することを表明してから最初の号である。したがって志賀が郷土三河に対してある種の意気込みをもって書いたことは想像に難くない。

三河男児歌

汝不見段戸之山六千尺。絶巔參天終古碧
又不見矢矧之水三十里。急湍噬石疾於矢
想昔孤軍拋此險。欲唱勤皇攘妖魘
借問當時將者誰。足助次郎臣重範
須臾賊兵勢如雷。千騎万騎山轟天来
吾軍奮戰支不得。七分死難三分潰
潰者忍辱匿隴嶠。枕薪嘗胆欲報仇
機兮不到余烈在。鬱々久待天定秋
嗟吁上帝之眼不朦朧。忽於茲土降英雄。
段戸之山秀兮。矢矧之水清兮。鍾靈孕出東照公
揆乱反正天所縱。維文維武贊皇猷。
江戸開府統政教。舜雨堯風六十州
何料治極人心弛。由来文恬又武熙。
大勢取次趨西南。茲土佳氣長已矣
挽回豈無時。復興竟有期
嗟吁段土之山為誰高。矢矧之水為誰号
三河男児請往矣。三河男児須奮起⁽¹⁰⁾。

これが、郷土三河への愛情＝郷土愛を表すことは自明であろう。ただし、それは静的に郷土愛を歌ったものではない。この歌は、「三河男児」に三河復活・三河振興への奮起を訴える歌である。

それには前提がある。それは、志賀（だけではないが）が、三河の現状を沈滞・衰退ととらえていることである。

薩摩の官吏長州の御役人として甚だもてはやさるゝことながら廿二年前までは日本の政府は三河の政府なり徳川家は三河より興り本多氏も酒井氏も奥平氏も彼も是も皆三河より興り…〔以下略〕⁽¹¹⁾

幕藩体制の創始者徳川家康は、岡崎（西三河の中心都市）の出身であった（志賀の生家は、家康生誕地岡崎城に近い康生である）。言い換えれば、三河出身者が、幕藩体制という支配体制をつくり、250年ものあいだ君臨してきたのであった。ところが、明治維新により幕藩体制は崩壊した。それは、三河のまた、志賀自身のアイデンティティをゆるがす出来事であった。

また、維新後の三河は衰退・沈滞という状況になった。

今日の三河は如何実に悲むべき状態となれり三河人士の社交上に勢力なきは誰人も知る所なるが独り是に止まらず三河の国はイツノ間にやら二河の国となり今や又一河の国とならんとすと云ふ其他山林原野に到る所他国人に専有せられ三河人は只是を羨み見るのみなりとはイカニ東照公、本多忠勝公の地下なる遺霊に対しても顔色なきことなり⁽¹²⁾

この三河の衰退は、二つの方面にもとめられる。第一は、維新以降、“中央”で活躍する人物がいなくなったことである。譜代大名や旗本領が集中し幕府の一つの基盤であった三河（西三河）出身者が政府内に入ることができなかったことはもちろんであるが、それ以外の方面で活躍する人材にも乏しいというのが志賀の嘆きである。そのことは三河郷友会の会員、とくに協力員や郷外部の顔触れを見ればある程度うかがうことができる⁽¹³⁾。

第二に、幕末・維新期の経済的混乱にもとづく、三河の地域社会の衰退・沈滞である⁽¹⁴⁾。以上を志賀は、三河→二河→一河とやや自虐的に表現している。

「三河男児歌」の前提には、こうした三河の“衰

退”があり、志賀は三河男児にそれを復興する主体となることを求めているのである。

そのための前提、あるいは軸となるのが三河への“郷土意識”“郷土愛”であった。

その郷土意識・郷土愛を構成する要素は、基本的には、時間・空間の共通性、つまり歴史性であるように思われる。具体的には、前にも述べた「徳川の世」は、徳川家康＝三河国人がつくったという歴史性にもとづく自負心・矜持であり、「三河男児歌」でも、それは郷土意識・郷土愛の大きな軸となっている。

この徳川家康を生んだという点は、「三河男児歌」以外にもさまざまなかたちで見ることができる。志賀は、この「三河男児歌」のすぐあとに掲載されている文章の中で、「日本人種ハ世界ノ歴史上ニ何等ノ成跡ヲ遺シタルカ」⁽¹⁵⁾と問い、①「鯨族ヲ漁撈スル戦船」世界で最初に製造したこと、②300年にわたる「太平昭代(二三ノ小一揆ヲ除ク)ヲ成就」したこと、③「百五十万ノ人口ヲ保有セシ大都ヲ(江戸)創設」したこと、④世界で「最モ金銀ヲ纏メタル建築物(日光廟)ヲ造り出」したことの4点をあげている⁽¹⁶⁾。相当に主観的、かつ強引な選択であり、かつ数字の過大化と過少化がある(たとえば「二三ノ小一揆」というのは、どういう根拠にもとづくものであろうか。またその小一揆の中に三河加茂一揆は入っているのであろうか)。しかし、志賀は、この4点すべてが、三河人が成し遂げたこととして、三河の歴史的な意義を主張しているのである。そして、もちろん②～④は徳川家康にかかわるものであった。

この時期に全国で現れた郷土誌が、国体論的な立場から郷土を“天皇”(現実には天皇に尽くした忠君愛国者等)に結びつけることによって価値化・意味づけを行った⁽¹⁷⁾。「三河男児歌」においてもそうした傾向はないわけではない(足助重範についての評価はそうした観点からなされている)。しかし、それよりも封建的支配層の、しかも天下統一をなしとげた覇者＝徳川家康を生み出した場である点により重点がおかれており、そこにアイデンティティを求める視点、あるいは封建支配層という強者の立場を自らを同化する視点がその歴史認識から導き出される。当然、それは現在の覇者、薩長政権への対抗的、批判的意識となる。

段戸山・矢作川等の三河の凛冽な美しい自然が最初に歌われている。それらもまた、自らの郷土の象徴であり、自分たちのアイデンティティの根幹だった。しかし、こうした郷土・自然は、“風景”という外的存在にとどまるものではない。あくまで三河の人びとがその共通する時間・空間の中で生きてきたという共同性を前提とする価値であり、それによって見出された“美”なのである。

つまり、「三河男児歌」では、前段で歌われた三河の風土・風景は、それ自体の凛冽な美しさだけではなく、それが三河武士を生み、その中から東照君＝家康が現れることの前提として歌われているのである。

またそこで注目しなければならないのは、この歌で段戸山⁽¹⁸⁾という山が歌いこまれていることである。三河にはより高名な鳳来寺山(標高695メートル)や、より標高の高い茶臼山(標高1,415メートル)がある。にもかかわらず志賀が段戸山をもち出したのは、なぜかということである。それは、おそらくは、この山が、その西麓を流れる段戸川によって矢作水系の中にあるからではないかと考えることができる。

志賀は、この詩の中で家康の存在を三河のアイデンティティの中核に据えている。そして、家康、さかのぼればその祖先である松平氏は、矢作水系がかたちづくった地域で生まれ発展してきた。その意味で志賀が三河という場の中でも強く前面に出したかったのは、矢作水系に囲まれた場であり(志賀が号として使っている「矧川」^{しんせん}は、矢作川のことである)、そうした文脈の中で段戸山が茶臼山や鳳来寺山を差し置いて登場したのはでなかろうか。志賀の郷土意識の中核は、徳川家康という封建的覇者の存在なのである(その意味では、志賀の郷土意識は、三河全体というよりは、西三河に対する郷土意識である)。

3. 国粹保存旨義に内包される“地方”

前述のように、志賀重昂は、1888(明治21)年4月に杉浦重剛・三宅雪嶺らとともに政教社を設立した。同社は、雑誌『日本人』を発行した。志賀はその編集人であり主筆になったのである。

周知のように、この『日本人』において志賀は、国粹保存旨義＝国粹主義の立場から論陣を張った。志賀の国粹保存旨義について詳しくは、先行

の諸研究にゆずるが、本稿の立場から、行論に必要な最低程度の言及をしておきたい。

国粹保存旨義は、明治維新以来の「日本分子打破」⁽¹⁹⁾の動き＝西洋化にたいして、「日本の国粹を保存し、之を以て日本国民が進退去就の標準となす」⁽²⁰⁾というものであった。

では国粹とはなにか。志賀によれば、「日本の海島を環繞せる天文、地文、風土、気象、寒温、乾湿、地質、水陸の配置、山系、河系、動物、植物、景色等の万般なる困外者の感化と、化学的の反応と、千年万年の習慣、視聴、経歴」⁽²¹⁾といったものが、大和民族の中に作り上げたのが、「一種特殊なる国粹(Ntionality)」⁽²²⁾なのである（ただし、少なくともこの時点で、彼は、具体的に何が“国粹”なのかを積極的にあきらかにしていない）。

志賀は、西洋からさまざまな文物を取り入れることそれ自体を否定するわけではない。しかし、その性急な、かつそれを絶対化する姿勢は、「日本分子」を破壊するものであり、日本という国家・社会の根源を破壊するものとして批判し、“国粹”を国家の方針とすることを主張したのである。

とくに国会開設と憲法の発布が迫り、日本という国民国家の基本的な枠組、および本体が完成にむかいつつある 1888 年段階において、志賀の、そして政教社の危機意識は強いものがあった。

要するに我日本の時事は転た頻繁にして、国会開設の期限已に切迫して、憲法の発布も亦漸く近きにあらんとするを以て、苟も三千八百万の蒼生か安否隆替を負担す可き国家の代議士にして、万一にも彼の滔々たる「塗抹旨義」若しくは「日本分子打破旨義」の波瀾中に捲き込まるゝが如きものあれば、斯の堂々たる大日本国の運命も、三千八百万の蒼生が前途の位置も、亦竟に何たるを知らざるなり⁽²³⁾。

そのため、志賀は、「滔々たる世論に牴牾し奮て「国粹保存」の大義を疾呼絶叫し、喜んで紛紜の衝に当り、以て百万画策し、鋭意大日本国が当代の危急を救拯せん」⁽²⁴⁾としたのである。

たしかに志賀の国粹保存旨義は、ナショナリズム・国家主義の一形態であろう。しかし、彼の国粹保存旨義は、近代日本のナショナリズム一般と異なり、少なくとも強烈な国体論的色彩をもつものではない。もちろん彼が“天皇”の価値を認めているのは前提であるにしても、志賀は、天皇ま

たは、それにまつわるもの、つまり国体論的要素を突出して強調することはしない（前述のように「三河男児歌」における郷土意識においても同様であった）。

そのことと、おそらくは無関係ではないが、志賀は、これらの議論の中で“臣民”ではなく、「国民」（あるいは「人民」や「日本人」）という言葉を使う⁽²⁵⁾。それは、志賀が彼らを臣民として国家＝天皇に隷属するものではなく、ある程度の自立性と、それにとまなう自発性をそなえた存在としてとらえているからである。もう少し言えば、彼が、日本という国家・社会の基盤としてとらえるのは、“国民”としての日本人であり、その自発性なのである。

志賀は、「日本国家の元素たる最多数の人民」⁽²⁶⁾という言葉を使う。そうした人びとは、志賀の主張全体から言えば、“地方”に在住し、“生産”に日々いそしむ中間層と見られる人びとである。その意味で志賀は、日本という国家・社会の基盤は地方社会であるととらえているのである。もう少し言えば、それは志賀重昂の思想には、“地方”（あるいは“地域”と言い換えることも可能であろう）という契機が入っているということになり、論理的にはこの地方・地域において、“国粹”は保存されなければならないということになる。

ところが、中央集権の結果、「今日の地方は全体に疲弊して、人身に譬ふれば全身衰弱病者の如し」⁽²⁷⁾という現状がある。したがって志賀の所論は（あるいは志賀の所論も）単に国粹保存旨義を採用するだけではなく、地方社会・地域社会の振興策を含むことになる。

〔前略〕「日本旨義」を懐抱せる人士が唱導する処を追随すれば「国粹保存旨義」となり、非模倣旨義となり、民力休養となり、租税軽減となり、或は殖産論となり、或は興業論となり、或は農業の改良策となり、或は貿易奨励策となり、或は販路拡張説となり、或は実業社会と気脈を連絡するの順序となり…〔以下略〕⁽²⁸⁾

あるいは、より端的に次のようにも述べている。

然れば予輩は世上幾多の壮士有志家に忠言するに、希くは今より自重自愛して生産世界に入り、実業家と利益と共にし、農工商社会と進退去就し、至誠深切^{ママ}以て諸般事業の経画に周旋せよ…〔以下略〕⁽²⁹⁾

これは、いわばポスト自由民権運動の国家がとるべき方向を経済活動による地方社会の充実にもつめたのであり、また、それを国家の発展の基礎においたのである(そのことは志賀だけではなく、政教社の人びと、また徳富蘇峰らに共通する意識であった⁽³⁰⁾)。いずれにせよ、志賀の国粹保存旨義と地方・地域の振興は表裏の関係をなすものであった。

4. 志賀重昂の三河振興構想

1889(明治22)年8月、興参協会という団体が設立された。この団体の目的は、「三河ノ進運ヲ促致センコト」(「興参協会設立趣意書」)⁽³¹⁾あるいは、「一国〔三河国一引用者〕ノ団結ヲ謀リ大ニ興参ノ実ヲ挙クル」(興参協会規約第1条)⁽³²⁾ことであった。呼びかけ人としては加藤六蔵・古橋源六郎・早川龍介など三河の著名人とならんで志賀も名をつらねていた⁽³³⁾。同じような目的をもつ三河郷友会との関係はあきらかにできない。しかし、少なくとも、この時期の志賀が、前述の『みかは』や三河郷友会とのかかわりの延長線上に、三河振興に興味をもち、加藤六蔵・古橋源六郎・早川龍介といった東西三河の有力者と関係をもちつつあったことはわかる。

前章で述べたように志賀重昂の国粹保存旨義には、“地方”“地域”という契機が含まれ、さらには地方振興・地域振興に結びついていた。とすれば、最初に述べたような三河への強い郷土愛をもっていた志賀が、三河という地方・地域社会の発展・振興を構想するのは自然であった。

志賀の三河社会への見方を再び提示すると次のようなものであった。

岡崎地方の疲弊は猶ほ全身衰弱者の如し。医師の全身衰弱者を治療するには、或は牛乳を飲ましめ、或は滋養物を食はしめ、或は適宜の運動をなさしめ、或は近き所に旅行なさしめ、〔中略〕然れば岡崎地方の全身衰弱を治療せんにも亦斯くの如く…〔以下略〕⁽³⁴⁾

ここでは岡崎地方としてあるが、「疲弊は猶ほ全身衰弱者の如し」というのは、おそらくは志賀の認識においては三河全体にあてはまることであろう。

志賀が三河とかかわる覚悟を示した『みかは』第9号の「三河新聞上ニ於ケル予」には、これから、『みかは』で論じる予定の三河振興の問題が

予告的に示されている。

第一は、教育の問題である。志賀は教育家ではない。しかし、「年来少年ノ男児ヲ教育シタル些少ノ経験」⁽³⁵⁾はあった。彼は、その教育の経験を生かして、三河の教育について述べたいと言う。

第二は、産業の問題である。「予ハ又経済ニ関スル鄙説ヲ毎二本紙上ニ発表セントス」⁽³⁶⁾。

第三に、彼は政治的な問題も『三河新聞』であつきたいと言う。「自由旨義ノ説」「改進黨義ノ論」「保守主義ノ説」「三河分県論」「三河非分県論」⁽³⁷⁾。ただし、この政治の問題について彼は自己の立場を鮮明に押し出すことはしない。つまり、さまざまな立場からの「諸寄書ヲ撰沢」⁽³⁸⁾して、それを紙面に掲載するというのが、志賀のスタンスである。

実際にその後の『みかは』の中で志賀は、しばしば三河振興に触れてはいる。しかし、具体的に論じたのは、志賀が、1889年の夏に帰郷した折の体験を記した矧川閑客志賀「ふるさと日記」(『みかは』第9号附録1889年10月1日)の中で述べていることにほぼ尽きている。決して体系だったものではなく、しかも「岡崎地方」に問題を限っており、いささかの物足りなさを感じるが、ともかくこれを見てみよう。

まず教育の問題である。引用に示されているように志賀には、教育に対する経験が全くなかったわけではない。彼は、1884(明治17)年7月に札幌農学校を卒業すると、9月から長野県立長野中学校の教諭となる。しかし、翌年、義憤に駆られて県令木梨精一郎に“鉄拳制裁”を行い、長野中学を免職になる。そのため東京に出て、さらには南洋視察に赴く。そして帰国後、杉浦重剛の東京英語学校で地理学を教えながら、家塾を開いていた⁽³⁹⁾。その意味では、まったく教育につながりなかったわけではない(のちには早稲田大学教授となっている)。

志賀は、小学校の教育についての改善策を次のようにまとめている。

- (一) 学問五分。体操五分。
- (二) 子供をいぢけさしむる勿れ。
- (三) 子供と午前学校に到り、午後は魚釣り鯰捕りを意の儘にせしめ夕に復読せしめ、臥寝の節、父兄より井田合戦、家康公、忠勝公、鳥居強右衛門などの譚をきくこと。
- (四) 高等小学にては地理学の科程を拡張すべ

し。少年の智識を開発し、兼て好奇遠征進取の觀念の揮興せしむるは地理学の教科に若くものなし⁽⁴⁰⁾。

この志賀の教育方針案は、緻密な体系だったものではない。あるいは思いつき程度のものかもしれない。それでもさまざまな要素が含まれ、志賀の意図は伝わってくる。

第一は、近代の学校教育批判の定番ともいうべき批判であるが、学校教育の知育偏重を排している点である。たとえば知育に対する体育の重視である。この点は、彼自身が、南洋に航海した折、熱病者や脚気患者が多数出た体験から実感したものである。ただ、一般的な知育批判にとどまらない点もある。たとえば、(三)に見られるように自然と触れ合う“遊び”の重要性も強調している点である。さらには、(二)のように学校教育の形式的な厳しさも批判しており、むしろこの点が主眼かもしれない。

第二は、この場合、とくに三河にかかわる問題であるが、「井田合戦、家康公、忠勝公、鳥居強右衛門などの譚をきく」として、いわば郷土教育の視点を示している点である。

第三は、地理教育の充実が指摘されていることである。これは、志賀が地理学者であるといういわば手前味噌的な感覚からだけからきているものではない。志賀は、地理学が「少年の智識を開発」するだけでなく、「好奇遠征進取の觀念の揮興せしむる」ものとしてとらえ、その点に期待しているのである。それは、おそらく是国内での雄飛だけではなく、『南洋時事』に示されるような、日本人の海外への雄飛する姿勢を養うものとして期待していたからであろう。換言すれば、志賀は一方で三河の郷土意識を重視しながらも、他方では、そこだけで完結しない人材の育成を目指していたということである。

『三河郷友会雑誌』の言説の中では、しばしば「近時我三河人にして社会に雄飛し名声を博取せるもの少なからず」（無署名）⁽⁴¹⁾というように三河人の「雄飛」という言葉が使われる。詳しくは別稿で述べてあるが⁽⁴²⁾、それは地域内にとどまらず、第一に、東京＝中央において名をあげること、第二に、「濁りなき心あはせて三河人 海の外まで名をや流さん」（大林意正）⁽⁴³⁾というように三河人が海外に進出するという二つの面をもっていた。そして、『三河郷友会雑誌』では、

高等教育を受けることが、三河人の雄飛の手段として、またそれ自体三河人の雄飛の具体化として位置づけられ大いに推奨された⁽⁴⁴⁾。また、それは、県に対する三河における中学校の設立の要求と、三河郷友会等による東京における学生寮の設置という二つの方向に帰着した（志賀もその一員であった興参協会もこの学生寮の設置を推進した）⁽⁴⁵⁾。

志賀重昂の三河振興策の第二は、産業振興策である。これについてももちろんしも体系的な提案はないが、志賀は三点ほど産業振興策をあげている。

志賀はまず産業の多面的な展開を求める。先ほどの引用で、志賀は、岡崎地方の状況を「全身衰弱者」と形容したのち具体的な療法を次のように述べている。

或は大平、菅生、矢矧川などへ鮭、鱒の卵子を投じて孵化せしめ、或は明大寺山辺には松を植ゑ付け、川々の堤防に胡桃樹漆樹を繁殖せしめ、農家毎に五六羽の鶏、一頭の豚を飼養し、共有地には牛などを牧し、且つ人々箇々皆質素にして他人の侮りを受くるなからんことを目的とし、十年間、漸次に地方の疲弊を癒やす工夫をすることよけれと⁽⁴⁶⁾。

前述のように岡崎地域に限定しての方策である。現在より寒冷であるとはいえ、気候のうえで大平川・菅生川・矢作川で鮭が繁殖できるかはかなり疑問である。鱒は、ニジマスなどの小型の鱒は繁殖可能であろう。注目すべき点があるとすればその次の部分である。「農家毎に五六羽の鶏、一頭の豚を飼養し、共有地には牛などを牧し…」という部分である。たしかに農家毎に五六羽の鶏が飼われているのは、近世以来の農村の風景であるが、そこに豚が加わるとやや様相がかわる。言うまでもなく、豚を食用としたのは、近代以降であり、養豚⁽⁴⁷⁾は、規模は小さくはあっても、小農の可能性をさまざまなかたちで引き出そうという提案ではあるし、第一次世界大戦後の碧海郡を中心とする“日本丁抹”地帯での多角形農業の先駆けとなるような発想である（とまで言えば、評価しすぎかもしれないが）。

それ以外の産業についてであるが、志賀は、岡崎には、陶土・石、また薪が豊富にある、とすれば、それを利用して、陶器産業をおこすべきだと言う⁽⁴⁸⁾。その場合、瀬戸・九谷・伊万里などの

「美しき優しき陶器」を模倣するのではなく、「寧ろ本業焼の疎物即ち土鍋行平片口等の如く甚だ中等以下に需要あるものを盛んに製り出したらんには、却りてよろしからん」⁽⁴⁹⁾というのが志賀の判断である。

また、これには追加的部分がある。

『日本風景論』の中に三河の花崗岩について触れた部分がある。すなわち、志賀はこの著作の中で全国の花崗岩について論じているが、三河の花崗岩についてかなりページを割いて論じている。その結論は、「岡崎以北の花崗岩〔中略〕細粒若くは中粒にして且耐火性なるもの多」⁽⁵⁰⁾く、いずれ「参河の石材は無限の販路を発見せん」⁽⁵¹⁾ということである。その場合、志賀は、「今日に当りて最も稽查すべきは運搬賃に在り」⁽⁵²⁾とも言ひ、全体とすれば三河の産業振興論の一環として考えることができる内容になっている。

こうした志賀の議論は、『三河郷友会雑誌』等で展開された三河の産業振興論とは、かなり異なっている。『三河郷友会雑誌』で、まず主張されたのは綿作＝綿業の発展という問題である。

三河の平野部は農業がさかんな地域であった。とくに矢作川流域一帯で栽培される木綿は、近世以来、「三河木綿」として加工され、全国へ出荷された⁽⁵³⁾。そのため『三河郷友会雑誌』ではまず綿＝木綿が問題にされているのである。しかし、それ以上に關心をもたれたのは、養蚕・蚕糸業である。『三河郷友会雑誌』には、養蚕・蚕糸業についての記事がさまざまのかたちで見出される。第1号から第5号に限定しても次のような記事がある。寺部治平「養蚕ノ話」(第2号、1889年1月)、「養蚕番付」(第3号、89年2月)、小柳津友治「蚕業の前途」、寺部治「養蚕ノ話(続)」(以上、同前)、「宝飯郡蚕業の近況」(以上、第4号、89年3月)、「三河協同製糸業組合」「豪商一大製糸会社ヲ設立セントス」(以上、第5号、89年4月)等々。この時期の国粋主義者たちは、日本の独立のための手段として養蚕を重視していたというが⁽⁵⁴⁾。志賀は少なくとも三河については、養蚕を語っていない。その意味では、志賀の三河振興論は、『三河郷友会雑誌』での議論との差異が目立つ。志賀は木綿・生糸という基本的な物産の問題は避け、あたらしい産業の可能性を模索していたと考えることもできようか。

また志賀は、産業振興論の一環として三河から

長野県飯田にいたる馬車鉄道の敷設についても論じている。

志賀は、本来、岡崎から飯田まで馬車鉄道で結んでも建設費借り入れのために利子を払うだけの純益が出るかは疑問だと言う⁽⁵⁵⁾。しかし、現実には飯田は、生産物を東京や岡崎に送り出す場合も、逆に東京や三河から物資を運送する場合も、道路事情が悪く、遠路を迂回して上田や松本まで送り、その後、東京に送り出していると言う。とすれば、「此の里〔飯田―引用者〕と岡崎との間に馬車鉄道にして落成せば前きの迂廻せる道路に頼らずとも岡崎停車場より汽笛の声と共に東海道鉄道にて東京に送るべく、三州の産物は固より尾州遠州のものも亦一度は岡崎を経て飯田にいたりぬべし」⁽⁵⁶⁾と言う。そしてそうした交通の要所になることは岡崎にとって利益になるというのが、志賀の所論である。

なお、この鉄道敷設問題は、この後、より本格的な鉄道敷設をめぐる現実の問題になる。

すなわち中央鉄道(中央線)の敷設問題である

この路線の構想は八王子から塩尻まではほぼ確定していた。しかし、塩尻と名古屋のあいだは、二つの構想が対立していた。一つは「木曽線」で、塩尻から木曽路をとおり、さらに木曽福島経由で岐阜県から名古屋にいたるものであった。それに対して「伊那線」は塩尻から南下して伊那谷・三河経由で名古屋にいたるものであった⁽⁵⁷⁾。

木曽線は三河をとおらず、三河としては伊那線を期待していた。しかし、結局は、木曽線に決まり、志賀、また三河の人びとの構想した岡崎―飯田間の鉄道構想は挫折した。

以上、志賀重昂の三河(正確に言えば、西三河の中心である岡崎)振興構想を検討した。それは、決して体系だったものではないし、思いつきの域を出ないと言えないこともない。かつ、その後、この議論が発展していった形跡は、少なくとも『みかは』では見あたらない⁽⁵⁸⁾。しかし、岡崎という地域に即して産業を振興させていこうという姿勢はうかがえ、その限りでは説得力をもつアイディアも盛られている。

5. 薩長政府への緊張感の弛緩

前章で述べたように、志賀重昂は、三河の経済発展についての構想をもっていた。しかも、その経済的発展(一般化すれば、日本の地方社会の発

展）は、「真成なる地方自治の精神」⁽⁵⁹⁾と表裏の関係にあるという認識ももっていた。言い換えれば、志賀は、経済的发展と“地方自治”とをセットとしてとらえていたのである。そうした自治に裏づけられた地方社会の発展を目指した志賀は、現実の薩長藩閥政府の内務官僚や内務省には、地域の側からの発展構想を阻害しかねないとして強い批判的意識をもっていた。それは、初期の『日本人』に掲載した文章にはっきり出ている。

日本国裡に完全なる自治制度を發達せしめんとせば、良し此省〔内務省一引用者〕を全廃せざるも、其本省の定額の如きは大に節減して可なる者ならん…〔以下略〕⁽⁶⁰⁾

そもそも志賀は、『日本人』を発行しはじめた1888（明治21）年の段階、つまり大日本帝国憲法の公布＝1889（明治22）年2月の直前の段階には、公布されるはずの憲法とそれを運用する帝国議会に対する強い疑念・懸念をもっていた。

不幸万一憲法も国会も転た不完全にして、社会の輿望に適はず、人民の権利を小範圍に狹窄し、或は言語を杜絶し、或は謹直篤信なる議員を拘留し、強ひて議会に解散を下命し、暴の義に勝ち、惡の善に勝ち、不徳の徳に勝ち、非理の正理に勝ち、社会の健全なる發達を障礙し狂妄至らざる無きに到りては、唯夫れ革命あらんのみ〔以下略〕⁽⁶¹⁾

志賀は、憲法や国会が社会の健全な發達を阻害する場合は、「革命あらんのみ」とまで言い切っているのである。それは、藩閥政府に対する不信感の表明であり、政府＝国家とのするどい緊張を表現するものであった。

しかし、大日本帝国憲法発布後は、志賀の姿勢は変化する。

志賀重昂が『みかは』にかかわった最初の号（第9号、1889年10月1日）で、前掲の「三河新聞紙上ニ於ケル予」という文章に続き、「三河人士今日の覚悟」という文章を載せている。そこで志賀は次のように三河の立場をとらえる。

徳川政府顛覆の際より今日に到るまで実に二十二年、此の間三河人士は如何なる状態なりしか。想ふに予輩三河人士は徳川党なり、即ち失敗者なり、即ち薩長の反対者なり、即ち現時の政府に容れられさりしものなり〔以下略〕⁽⁶²⁾

これは今まで彼が何度も書いてきた認識である。しかし、彼がこの文章を書いた頃には状況は

変化したものと志賀はとらえている。志賀は、「今や自治制も既に布告せられ、帝国議会も明年より開設せられ、予輩三河人士も亦日本国民として日本政府に容れられべき時に到達せり」⁽⁶³⁾と言う。文字通り受け止めれば、維新から20年以上が経ち、自治制も布告され、帝国議会の開設も間近になり、すなわち国民国家の完成をひかえ、やや飛躍を承知で言い換えれば国民的一体感が求められる中で、再び三河が陽の目を見る可能性が出てきたということである。

しかし、もう少し具体的な要素もあるように思われる。

1889年10月、東京市本郷森川町の旧岡崎藩主本多忠敬の邸宅内に、戊辰戦争と西南戦争の岡崎藩からの参加者10名の忠魂碑が建立された⁽⁶⁴⁾。それについて、志賀は、これについての一文を『みかは』に寄せている。志賀によれば、これら10名は今まで「賊軍」の汚名を着せられてきた。それは、志賀にとっては忍び難いものであった（志賀の従兄もそのうちの一人であった）。それに対して、「今回ノ恩命アル予ハ覚ヘズ大政府ガ処置ノ公平ナルヲ感泣シタリ」⁽⁶⁵⁾と書いている。

また、その一月前、岡崎では「岡崎三百年祭」が行われた。これは、「徳川家康公御入府の三百年に相当するを以て」⁽⁶⁶⁾、岡崎の文化人伊藤小文司等が中心となって、岡崎公園（岡崎城を中心とした公園）内の東照宮で行われた臨時祭典であった。参拝者は多く、「さしにも広き公園内も立錐の地なき迄賑はひたり」⁽⁶⁷⁾と記事は述べている。このような忠魂碑の建立や家康入府の記念祭等を行うことが可能になったのは、志賀のいう「今回ノ恩命」があったからである。この「恩命」とは、この年の2月11日の大日本帝国憲法発布にともなって出された大赦令のことである。この大赦によって戊辰戦争・西南戦争の賊軍も許され、その名誉が回復されたのである⁽⁶⁸⁾。それは、旧幕府勢力との和解でもあり、それによってこうした行事が可能になったのである。また、それは、前に引用した文の「予輩三河人士も亦日本国民として日本政府に容れられべき時に到達せり」という志賀の感慨を呼びおこすことになったのである。

しかし、それは、同時に、志賀の薩長政府への緊張感も緩ませることになったようにも見える。前の引用においては、志賀は、「大政府」という

言葉まで使っている。

それは、額田県再置運動における志賀の立ち位置にも反映していく。

額田県再置運動は、三河分県運動とも言われ、廃藩置県初期の段階で三河全体が統合されて成立した額田県（県庁は岡崎におかれた）を再び設置し、三河を愛知県から独立させようという運動である⁽⁶⁹⁾。この動き＝運動は、①1875（明治8）～76（明治9）年、②1880（明治13）～82（明治15）年、③1889（明治22）～92（明治25）年の3回にわたって表面化しているが、このうちもとても大規模だったのが3回目のものである。

運動はかなりの盛り上がりを見せ、1890（明治23）年1月24日、元老院へ「三河の国各郡有志総代」471人の署名による「建白書」が提出された。そしてその建白は元老院で可決された。また国会への3回への請願が行われた。とくに第2議会への請願は3万人の署名者を集めた。

この運動に対して志賀は慎重に対応した。

1889年11月8日の『扶桑新聞』（名古屋で発行され、三河分権論にはきわめて批判的であった）は、志賀について次のような批判を掲載している。

同氏〔志賀重昂一引用者〕が三州岡崎に來りて国粋頭彰派の勢力を張らんとせらるゝは予輩元より其分たることを賞す而して同氏が三河分県論の事に奔走し早川龍介氏の提灯を持つて其光を三河に耀かさんとする何ぞ三河は已に暗黒の世を脱せり何ぞ氏が提灯の光を頼まんや已に提灯の光を頼ます而して早くも前途を見るの人士多し分県の提灯恐らくば国粋派の光を増すに足らずして只だ早川氏の脚下を照らすに過ぎざらんか⁽⁷⁰⁾

早川龍介は、碧海郡中島村（現在は岡崎市）生まれの政治家で、県会議員としての活動を行う一方、額田県再置運動の中心として運動に奔走していた（第1回総選挙では、衆議院議員に当選した）⁽⁷¹⁾。また『扶桑新聞』は、これに続けて、より具体的に次のように言う。

又、志賀重昂氏には去る六日〔1889年11月一引用者〕より三州南北設楽郡へ分県請願書の調印を取る為巡回に出掛けられ南設楽郡の古橋源六郎氏も其を機会として国粋頭彰派を同地方に起こすの計画あり⁽⁷²⁾

ところが、これに対して『みかは』は、「然れども志賀氏は依然として今日まで東京に居

らるゝなり」⁽⁷³⁾として、それを否定している。また、次のような記事を載せ、志賀の立場を説明している。

前号にも掲載せし如く扶桑新聞紙上に志賀重昂氏が早川龍介氏の提燈持となり三河分権の事に奔走し且つ去る六日（本月の事なり）志賀氏は自ら南北設楽郡を巡廻し分県の調印を取り居れり云々の雑報ありしかば郷国なる氏が友人は該新聞を東京なる同市許に郵送し或は書翰を送り氏が名誉に關係する事などを忠告したるに氏は之れに一々答謝し且自分は未だ所謂分県に同意を公表したることもなく又今夏帰省の外三河国へ立ち入りたることもなきも去る六日に南北設楽郡を巡廻し居るとはこれ一身兩躰即ち天狗の所業なり〔以下略〕⁽⁷⁴⁾

すなわち、この記事は、志賀が、その日に愛知県にいたことはないことをあらためて断言し、それどころか、志賀は「自分は未だ所謂分県に同意を公表したることもなく」というように、三河分県論者ではないことを言い切っているのである。たしかに、志賀はそれまでの言動から見れば、三河への思い入れが強く、したがって、額田県再置運動に賛成の立場をとっているとみなされていたと思われる。『扶桑新聞』の“誤報”はそうした思い込みもあって書かれたものであろう。しかし、『みかは』の反論記事では、志賀の述べたことの引用というかたちであるが、額田県再置運動へのかかわりを否定しているのである。大日本帝国憲法が發布され、それに伴う大赦令を大きな契機に、この時期の志賀は、国民国家としての日本の一体感を優先し、国民国家としての秩序形成とは相容れない額田県再置運動から距離をおいたのではなかろうか。

6. おわりに

志賀重昂は三河＝郷土を愛することと日本＝国家を愛することの関係を次のように述べている。

人或は云ふ日本は一体也素より三河とか尾張とか薩摩とか故に区分するに及ばず三河は云々尾張は云々薩摩は云々なぞと云ふは少量なりとサレドモ郷を愛するは即ち愛国心の初めなり三河の意地を張るは日本の意地を張る初めなり故に三河の美風を誇るは少量と云へば云へ予は少しも圧はざるなり⁽⁷⁵⁾

志賀における郷土愛と愛国心、敷衍すれば郷土意識と国家意識との関係は、この文章で、とくに「一郷を愛するは即ち愛国心の初めなり三河の意地を張るは日本の意地を張る初めなり」という部分で基本的には説明されつくしている。

この文章は大日本帝国憲法発布後、つまり大赦令発布以後のものである。それ以前の郷土と国家との関係を直接示す文章は未見であり、こういった認識を志賀がいつからもっていたかを確定は出来ないが、少なくともこの文章では、要するに郷土を愛することは国家を愛することへ連続するものとして位置づけている。類似の議論は決して少なくないと思われるが、きわめて明快な説明ではある。

その前提は、“郷土”と“国家”は、お互いに矛盾のない、予定調和的な関係にあるものとしてとらえられていることである。つまり国家は郷土を拡大したものであり、郷土は国家を縮小したものなのである。この点が、志賀重昂の郷土意識と国家、もしくは国家意識との関係を考える場合のもっとも肝要な点である。これは、国家有機体論の一形態として当時（あるいは現在にいたるまで）一般的な議論であり、さまざまな思想的契機をもつ志賀も、大日本帝国憲法＝大赦令を契機として藩閥政府への緊張感を弱め、思想的な牙を抜かれた“穏健”な認識に絡めとられていったのである。

その後の志賀は、徐々に政府への批判の姿勢をゆるめ、日清戦争の最中の1894（明治27）年12月には、『日本風景論』を著し、日本の風景の卓越性を主張するかたちで、ナショナリズムを鼓舞する。また日清戦後には、日本の帝国化・大国化路線を鼓舞する姿勢が露わになって行くのであった。ただその過程はかなり緻密に迫る必要があり、その点は他日に期したい。

注

- (1) 拙稿「近代日本における“郷土意識”と社会的結合についての覚書き—そのかたちと先行研究の整理」（愛知学泉大学現代マネジメント学部『現代マネジメント学部紀要』第1巻第1号、2012年12月）。
- (2) 1990年代までの主なものは、本稿末尾の参考文献欄に列挙してある。また、近年は、『日本風景論』を対象とし、この著作がもつさまざまな問題を解明し、志賀重昂の風景観のみならず思想全体

の批判を試みる研究がかなり多く見られる。たとえば次のようなものである。大室幹雄『志賀重昂『日本風景論精読』（岩波現代文庫、2003年）、米地文夫「志賀重昂『日本風景論』における皇天・后土論—西南日本の火山記載と台湾補記をめぐって」（『総合政策』岩手県立大学総合政策学部、第5巻第3号、2004年3月）、同「志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心—中部日本の火山等に関する記載をめぐって」（『総合政策』第5巻第5号、2004年）、帆苅猛「近代風景観の成立とナショナルリズム—志賀重昂の『日本風景論』を中心にして」（『関東学院大学人間環境研究所所報』第4号、2005年）、安西信一「志賀重昂『日本風景論』における科学と芸術—無媒介性と国粋主義」（東北芸術文化学会『芸術文化』第11号、2006年10月）、荻原隆「志賀重昂の『日本風景論』—欧米的景観への憧憬」（名古屋学院大学総合研究所『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第46号、2009年10月）等々。ただし、志賀の思想は、当然のことながら時期ごとに変化しているのであり、『日本風景論』を中心にした志賀の風景観・思想を志賀の思想全体の中に位置づけることが必要である。その意味では、荻原隆は、志賀の生涯全体を対象とし、近代日本の保守主義という概念の中に、志賀重昂を位置づけようとしており、その研究は貴重である（「志賀重昂の国粋主義」、名古屋学院大学総合研究所『研究年報』第13号〈2000年12月〉、「志賀重昂の思想—国粋主義以降」『研究年報』第16号〈2003年12月〉、「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で」上・下『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第43号・第44号、〈2007年3月・7月〉ほか）。

概していえば、従来の研究が、志賀重昂（や政教社の思想家たち）の国粋主義を“健全なナショナリズム”として、一定の評価を下すのに対し、近年の研究は、かなりきびしい評価をするようになっていように見える。

- (3) 前掲「志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心—中部日本の火山等に関する記載をめぐって」。
- (4) 後藤『我郷土の産める世界的先覚者 志賀重昂先生』（警眼社、1931年）122～123頁。この伝記は本格的なものではないが、志賀に近い立場（弟子）の知る志賀重昂像を描いたものであり、貴重である。後藤は、愛知県西加茂郡挙母の生ま

れ。東京法学院を卒業し、『警察協会雑誌』の編集を行った。『残紅集』(政教社、1898年)などの著作がある(編纂委員会・豊田市教育委員会『豊田市史 人物編』豊田市、1987年、414頁)。

なお、福岡寿一『三河男児—志賀重昂伝』(東海タイムズ社、1974年)は、実質的には後藤の伝記をリライトしたものである。

(5) 志賀については、前述の伝記のほか、佐藤能丸編「年譜」(『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房、1980年)等の年譜を参照した。

(6) 「本会沿革史」(『三河郷友会雑誌』第14号、1890年1月)2頁。なお本稿で利用した『三河郷友会雑誌』は、基本的には東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵のものである。

三河郷友会の歴史については、三和総合研究所編『三河郷友会九十周年記念誌』(三河郷友会学生寮OB会、1989年)、三河郷友会創立百年史編集委員会(中村民雄)『ある学生寄宿舍の百年—財団法人三河郷友会学生寮—』(財団法人三河郷友会・三河郷友会学生寮OB会、2001年)がある。

また筆者は、「近代日本における国民国家と郷土意識—『三河郷友会雑誌』と三河振興構想」1・2(『コミュニティ政策研究』第10号・第11号、2008年3月・09年3月)で表題の観点から同誌を分析したことがある。

(7) 「三河郷友会規約総則」(1887年)。

(8) 編集委員会『新編 岡崎市史4 近代』(同委員会、1991年)357~359頁。なお、『三河旬報』には、志賀による記事は見あたらない。

ちなみに、『三河新聞』になったときに、わずか2か月のことであったが主筆になったのは、内藤湖南であった。そして、『三河新聞』に内藤を紹介したのは、志賀重昂であったという(小川環樹「内藤湖南の学問とその生涯」『日本の名著』第41巻、中央公論社、1971年、14頁)。また、内藤は、『みかは』第33号(1890年6月1日)に、東京大同新報記者という肩書で「空想の国民」という「社友論説」を寄せている。

(9) 志賀「三河新聞紙上ニ於ケル予」(『みかは』第9号、1889年10月1日)2頁。この号では、「みかは新聞」という名が使われおり、それを前提に志賀はタイトル、および文中で『三河新聞』という言葉を用いている。この段階でのちの『三河新聞』の構想が、太田と志賀のあいだで話し合われていたのかもしれない。

(10) 「三河男児歌」(前掲『みかは』第9号)1頁(表紙)。なお、この漢詩の引用に際しては、当用漢字のあるものは当用漢字を用い、それ以外は、原文のままにしてある。

また、志賀自身は次のように読み下している。

汝見ずや段戸の山は六千尺。絶巔天に参はりて終古碧なり」又見ずや矢矧の水は三十里。急湍石を噬みて矢よりも疾し」想ふ昔孤軍此の陰に抛り。勤王を唱へて妖魔を攘はんと欲す。借問す当時將たる者は誰れぞ。足助次郎臣重範」須臾に賊兵勢ひ雷の如く。千騎万騎天を轟かし来る。吾軍奮戦すれとも支へ得ず。七分は難に死し三分潰る」潰ゆる者は恥を忍ひて隴嶂に匿れ、薪を枕にし胆を嘗めて仇を報ひんと欲す。機や到らず余烈在り。鬱々として久く待つ天定るの秋」嗟吁上帝の眼は朦朧ならず。忽ち茲の土に於て英雄を降す。段戸之山秀てたりや。矢矧之水清りや。鍾靈は孕出だす東照公」乱を揆さめ正に反へるは天の縦す所。維れ文維れ武皇猷を賛すく。江戸府を開きて政教を統べ、舜雨堯風六十州何んぞ料らん治極て人の心は弛み。由来文恬又た武熙」大勢は取次に西南に趨き、茲土の佳気は長へに己めり矣」挽回は豈に時無からんや。復興は竟に期有り」嗟吁段戸の山は誰が為に高き。矢矧は誰が為に叫ぶ」三河の男児よ請ふ往けり矣。三河の男児須らく奮起すべし(同前)。

(11) (12) 志賀「在郷在京両部会小集会席上演説」(『三河郷友会雑誌』第6号、1889年5月)1頁。

(13) 前掲拙稿「近代日本における国民国家と郷土意識—『三河郷友会雑誌』と三河振興構想」1。

(14) ただし、実際の三河がはたして志賀の言うとおりであったかどうかは、慎重に検討してみる必要はある。

(15) (16) 〔無題〕(前掲『みかは』第9号)1頁。なお、この文章は、漢詩「三河男児歌」の後に掲載されて特別の表題はなく、あるいは「三河男児歌」というのが、総タイトルかもしれない。

(17) 前掲拙稿「近代日本における“郷土意識”と社会的統合についての覚書き—そのかたちと先行研究の整理」。

(18) なお、この詩には、段戸山の標高は「六千尺」=1,818メートルと歌われている。しかし、実際は、標高1,152メートル=約五千尺である。前掲

米地文夫「志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心—中部日本の火山等に関する記載をめぐって」の結論を斟酌すれば、志賀は、段戸山の高さを誇張してまで、この山の三河における象徴性を強調した考えられないわけではないが、単純に、この当時、段戸山の正確な標高が確定されていなかったことが、原因ではないかと思われる。陸軍測量部による、この地域の測量は、1890（明治23）年に行われており、「三河男児歌」が作られた時点では、正確な標高はあきらかではなかったのである。なお、管見の限りでは、『南設楽時報』（第49号、1920年11月号、表紙）所載の「三河男子の歌」では、「五千尺」に直されている。そして、1960年12月に岡崎市によって建立された「三河男児の歌」の歌碑（岡崎東公園）でも「五千尺」となっている。

(19) (20) 志賀「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す（『日本人』第2号、1888年4月18日）2頁。

(21) (22) 同前1頁。

(23) (24) 志賀「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に撰定せざるべからず」（『日本人』第3号、1888年5月3日）5頁。

(25) これについては、佐藤能丸『明治ナショナリズムの研究』（芙蓉書房出版、1998年）I—II「国粹主義における「国民」像の構想」に詳しく論じられている。

(26) 志賀「開国後の日本」（『日本人』第11号、1888年9月3日）15頁

(27) 志賀「自治の精神」（『日本人』第19号、1889年1月3日）19頁。

(28) 志賀「日本前途の二大党派」（『日本人』第6号、1888年6月18日）6頁。

(29) 前掲志賀「開国後の日本」16頁

(30) 鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』（筑摩書房、1969年）349頁。なお、荻原隆は、『日本人』以前の志賀においては「殖産興業」と「日本の花鳥風月」が一致していないことを指摘して、「志賀は近代文明と伝統の保持とが簡単には相容れないことを認めざるを得なかった」（前掲荻原「志賀重昂の国粹主義」14頁）としている。重要な論点の指摘である。

(31) 「興参協会設立趣旨書」（前掲『みかは』第6号）1頁。なお、この趣旨書は『三河郷友会雑誌』第10号（1889年9月）にも掲載されている。こ

の団体の活動については、あきらかにできないが、『みかは』第33号（1890年6月1日）には、「三河撰出の衆議院議員は宜しく興参協会派より挙ぐべし」（1頁）という記事があり、何らかの政治的動きがあったことを暗示している。なお、鈴木清節編『三河憲政史料』（同刊行会、1941年）には、この協会についての記述はない。

(32) 「興参協会の設立」（前掲『みかは』第6号）3頁。

(33) 前掲「興参協会設立趣旨書」。

(34) 矧川閑客志賀「ふるさと日記」（『みかは』第9号附録1889年10月1日）2頁。

(35) (36) (37) (38) 志賀「三河新聞紙上ニ於ケル予」（前掲『みかは』第9号）2頁。

(39) 前掲『我郷土の産める世界的先覚者志賀重昂先生』36～37頁。この家塾の塾生は三河出身者が中心で、大岩勇夫（名古屋市長）・柴田顕正（岡崎市立図書館長）などがいたという。

(40) 前掲矧川閑客志賀「ふるさと日記」1～2頁。

(41) 無署名「嗚呼是三河の名誉なり」（『三河郷友会雑誌』第15号（1890年2月）24頁。

(42) 前掲拙稿「近代日本における国民国家と郷土意識—『三河郷友会雑誌』と三河振興構想」2。

(43) 「文苑」（『三河郷友会雑誌』第4号、1889年3月）20頁。

(44) (45) 前掲拙稿「近代日本における国民国家と郷土意識—『三河郷友会雑誌』と三河振興構想」2。

(46) 前掲矧川閑客志賀「ふるさと日記」2頁。

(47) なお、三河地方の養豚は、重原藩の大参事であった内藤魯一が士族授産の一環として大々的に行おうとしたが、失敗した。

(48) (49) 前掲矧川閑客志賀「ふるさと日記」3頁。

(50) (51) (52) 志賀『日本風景論』（政教社、1894年）149頁・150頁・150頁。なおここは、米地文夫が不自然に三河にかかわる部分が強調されているとした箇所の一つである（前掲米地「志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心—中部日本の火山等に関する記載をめぐって」）。

(53) 編集委員会『新編 岡崎市史3 近世』（同委員会、1990年）。その場合、在来技術を使い、水車を動力とし、屑綿からも製糸ができる臥雲辰致が発明したばかりのいわゆるガラ紡績（臥雲式紡績機）に関心が示されている。

- (54) 前掲鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』346～353頁。
- (55) (56) 前掲矧川閑客志賀「ふるさと日記」3頁。
- (57) 「解説」(編さん委員会『愛知県史資料編25 政治・行政2』愛知県、2009年)。この部分は真野素行担当。
- (58) たとえば、「志賀重昂氏口述筆記」(『みかは』第20号、1889年1月15日)等には、「一国一州の生産力を増殖せんとする其方法」(3頁)が論じられているが、三河に即したのではなく、一般論である。また、志賀は、『日本人』ではさまざまのかたちで殖産興業論を論じている。
- (59) 志賀「自治の精神」(『日本人』第19号、1889年1月3日)19頁。
- (60) 志賀「日本生産略」四(『日本人』第15号、1888年11月3日)12頁。
- (61) 志賀「開国後の日本」(『日本人』第11号、1888年9月3日)17頁。
- (62) (63) 「三河人士今日の覚悟」(前掲『みかは』第9号)4頁。
- (64) (65) 志賀〔無題〕(『みかは』号外、1889年1月15日)1頁・4頁。
- (66) (67) 無署名「岡崎の三百年祭」(『みかは』第7号、1889年9月1日)3頁。
- (68) この点については、高木博志「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの一近代における「旧藩」の顕彰(『歴史評論』第659号、2005年3月)詳しく論じられている。
- (69) 稲田雅洋「額田県再置論—三河県独立運動」(『岡崎市史研究』第7号、1985年3月)、編集委員会『新編岡崎市史4 近代』(編さん委員会、1991年)。
- (70) 「志賀重昂氏と三河分県」(『扶桑新聞』1889年11月8日)。
- (71) 編集委員会『新編岡崎市史20 総集編』(編さん委員会、1993年)。
- (72) 前掲『扶桑新聞』。前掲の記事の次にありタイトルはない。
- (73) 「志賀氏三河に来らず」(『みかは』第13号、1899年11月11日)9頁。
- (74) 「扶桑新聞の雑報」(同前)9頁。
- (75) 前掲志賀「在郷在京両部会員小集会席上演説」2頁。

参考文献

- 志賀富士男編『志賀重昂全集』全8巻(同会、1928～29年)
- 宇井邦夫『志賀重昂 人と足跡』(現代フォルム、1991年)
- 戸田博子編『志賀重昂 回想と資料 生誕百三十年記念誌』(戸田刊、1994年)
- 本山幸彦「明治20年代の政論に現れたナショナリズム」(坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』(未来社、1958年)
- 同『明治思想の形成』(福村出版、1969年)
- 松田道雄「日本の知識人」(『近代日本思想講座4 知識人の生成と役割』筑摩書房、1959年)
- 同「志賀重昂」(朝日ジャーナル編『日本の思想家』第2巻、朝日新聞社、1963年)
- 鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』(筑摩書房、1969年)
- 岩井忠熊『明治国家主義思想史研究』(青木書店、1972年)
- 松本三之助「解題」(『明治文学全集37 政教社文学集』筑摩書房、1980年)
- 佐藤能丸『明治ナショナリズムの研究』(芙蓉書房出版、1998年)

引用文献

- 後藤狂夫『我郷土の産める世界的先覚者 志賀重昂先生』(警眼社、1931年)
- 雑誌『みかは』第1号～第33号(三河新聞社、1889年6月～90年6月、岡崎市中央図書館所蔵)
- 『三河郷友会雑誌』第1号～第68号(三河郷友会、1888年12月～94年7月、岡崎市中央図書館・東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵)
- 雑誌『日本人』(第1次)第1号～第73号、1888年4月～1891年6月、日本図書センターによる復刻版を用いた)

(原稿受理年月 2013年12月2日)